様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：奨励研究
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ００１２９

研究課題名　「和服による活動」場面を導入した体験型学習プログラムの開発・実践及び評価

研究代表者
篠原　麻衣子（SHINOHARA, Maiko）

大阪教育大学・附属学校園・教員

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　580,000円

研究成果の概要：着付け講師を招き、製作の様子や現在の着物市場についての学習を行った。家庭科部による和装小物の製作を展示発表をした。「和服の活動場面を取り入れた体験授業」を校内研究発表し、授業のオンライン配信をし、家庭科教員や学生に研究協議会に参加して様々な意見をもらった。さらに、生徒たちには、和装の着装に関する問題点を明確にし、改善するように働きかけた。評価方法については、事前事後アンケートを分析し、一連のイベントに参加した生徒がどのように変化したのかを比較検討した。集団特性を確認するため他学年にも同様の調査を行った。今後は汎用性を高めるため開発した学習プログラムの有効性を検討し，
家庭科教育で再度改善する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
和服が一般化された衣服になれば、着物にたずさわる職人（繊維、染、織、デザイン、販売、和裁士、着付け師）など高齢化に伴う後継者不足や社会の需要を満たすことも可能になる。また着物は縫い直しができ、世代を越えて着られ、反物ひとつとっても無駄のない使い方ができることを取上げ、環境に配慮した暮らしについても提案することができる。本研究によって、これまでになかった和服体験型学習プログラムを開発・実践・評価することで、関心が低かった生徒達も伝統文化を理解し、文化の継承・創造に主体的に関わり、和服の着用を自然に行えるようになることが期待される。

研究分野：家庭科教育

キーワード：和服の活動　着付け　着物　伝統文化　和装

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

「和服の活動」場面を取り入れた体験学習～学びを人生や社会にいかす～

・知識及び技能： 衣服と社会生活の関わり目的に応じた着用、個性を生かす着用、衣服の適切な選択について理解すること。

・思考力・判断力・表現力等：健康・快適で持続可能な衣生活を送るための標題解決に向けた一連の活動について考察 したことを論理的に表現すること。

・学びに向かう力・人間性等：よりよい衣生活の実現に向けて標題解決に向け、生活を工夫し創造し、実践すること。 日本の生活文化に関する内容の充実，グローバル化に対応して日本の生活文化を継承することの大切さに気付くことができるよう「Ｂ衣食住の生活」においては，和食，和服など，日本の伝統的な生活についても扱うこととしている。　本時のテーマ設定において、研究主題が明確で、「日本の生活文化を継承すること」を取り入れての授業展開が大変やりやすいものであった。特に今回は、「和」を共通項に衣食住の他領域を１つにまとめての研究発表であったので、「創造する力」を生徒とともに育んだと言える。これからは，１つ１つの単元が独立したものでなく、「よりよく生きること」につながっているということを、生徒たちが、自ら気づき、自分自身で深めていけるような教材テーマを準備していく必要がある。

２．研究成果

「Ｂ衣食住の生活」は新指導要領から１つの、指導領域になったので、「衣生活の分野」の浴衣の着付け授業が、一過性のイベントではなく、「日本の生活文化を継承する」という目的をもった、実践の場となるということを伝えられた。そして今後は、「住生活の分野」を学び、日本の住まいと世界の住まいの違いや、「食生活の分野」において和食について 学習し、さらに「和」を意識しながらの授業計画を行っていく。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
衣服と社会生活の関わり、目的に応じた着用、個性を生かす着用、衣服の適切な選択について理解している。	健康・快適で持続可能な衣生活を送るための標題解決に向けた一連の活動について、考察したことを論理的に表現している。	よりよい衣生活の実現に向けて、標題解決に向けて、生活を工夫し創造し、実践しようとしている。

評価基準を設定すると、生徒たちの学習への取り組みが、1 学期に比べて向上していることがわかった。事前授業アンケートの結果でも、「伝統文化に興味がない」、「浴衣、着物のイメージが難しそう」が半数ほどいたのに対して、授業後のアンケートでは、自分の住まいにある「和」を探すことに興味を持ち、お正月や、夏祭りに向けて、和装で出 かけることを計画する声もあった。また、他学年の研究発表においても、「着物」の発表に興味を持って、研究取り組 みの成果を聴講していた。

今回は、「伝統文化」を取り扱うために、浴衣の着付けの研究授業を行った。実際参会者の質疑は多くはなかったが、 特に「ジェンダーについて」の質問が大変興味深かった。浴衣の柄が、明るく華やかなものが、女性用で、暗めの地味 な柄が男性用になっていた。男子生徒の中には、明るい色の柄を好むものもいて、準備する浴衣の種類も色とりどりに した方がよいと考えた。また、中学 1 年生の男子生徒は、身長的に S サイズ相当の生徒が半数以上いたが、用意したものはフリーサイズや M サイズが多く、「ついたけ」で着付ける男性の場合は、長すぎる傾向があった。今後はサイズや柄を男女ともに選べるようにしたいと考える。ただし、男性用の着物と、女性用の着物は構造が違うので、どちらでも 着られるというわけではないということを、理解させる必要がある。浴衣の着付けの授業を実際 5 時間ほど学習し、さらに着付け講師を招いて、着付け練習会を行うと、全体の衣生活の時間数のバランスはどのようになっているかという 質問があった。全体の時間数の中で、丸一時間着付けの授業をとるのではなく、着物の構造を理解するために、紙で着 物を作成し、着物を染色する様子や、織る様子を動画で紹介するなど、２部構成の授業展開を工夫して単発の授業より、継続性を持って授業を行えるように授業準備を行ったと説明をした。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名